詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

七夕の仙台駅で待ち合はせ
町田市　枝澤　聖文

△評▽有名な仙台七夕を見ようとあちこちから押し寄せてくる人であふれている駅。果たして約束の相手に会えたのかどうか。

ポストまで行くだけの道月涼し
平塚市　日下　光代

△評▽「月涼し」は夏の月のことをいう。投函のために外へ出たところ、月が輝いていたうれしさ。

手を引かれ祭の中を通りけり
北九州市　宮上　博文

参道の暗さにたたむ白日傘
川口市　高橋さだ子

向日葵やキャリーケースの増えるキズ
大洲市　坂本　梨帆

海の日や今日は眺むるのみの海
水戸市　永井　弘子

群青の海荒れ初むる草田男忌
東　京　吉田かずや

賑はひの裏の通りの屏風祭
香芝市　河野　嘉雄

踏石の踏まれぬところ苔の花
入間市　木嶋　務

海臨む丘に慰霊碑蟬時雨
河内長野市　守口　幸子

小川　軽舟 選

轟きてまだ緩みなき暑さかな
沼津市　川井大次郎

△評▽暑さがとどろくという感覚は異常なまでの今年の猛暑にふさわしい。暑さの緩む日を待って炎天を見上げるばかり。

移り啼く郭公霧の山河越ゆ
安中市　大澤信太郎

△評▽霧の中をカッコウの声が移って行く。下界の暑さを忘れる高原のすがすがしい自然詠だ。

風の無き夜の鍵穴夏の月
秋田市　鈴木華奈子

モノラルのコルトレーンや熱帯夜
伊勢市　奥田　豊

降りつづく雨に重なる蟬時雨
名古屋市　鈴木　幸絵

ネオン街祭提灯連ねたり
高槻市　黒田　豊子

アッパッパ着て難問を解き倦む
京都市　古川麻美子

梟や一晩で読むミステリー
仙台市　鎌田　傑

梅雨明けの爪切りの音響きけり
米子市　長田　遼平

縁側に岳父と地酒喜雨の夜
香　川　佐藤　浩章

西村　和子 選

朝食はカタカナづくめ嫁涼し
東　京　山口　照男

△評▽パン、コーヒー、ジュース、ヨーグルト。70代の作者から察するに、息子の嫁の作る朝食か。季語が肯定を表している。

蒼穹の硬さや草矢撥ね返す
東　京　望月　清彦

△評▽青空の張りつめた様を打ち出し、草矢がまるではね返されたように落ちた動きを描いた。

だんまりの三毛猫重し夕端居
三郷市　村山　邦保

かなかなの風にまぎれし夜明けかな
龍ケ崎市　小宮　光司

下風やはたりほたりと仏桑花
津　市　渡邊　健治

さつきまでここにゐた筈かたつむり
茅ケ崎市　古田　哲弥

ステルスのごとき蝶吐く木下闇
大　阪　芹澤　由美

赴任地へ橋を渡れば植田風
真岡市　小川　充

今もって厨に下がる渋団扇
鴨川市　冨川　康雄

アブダビの空を乗り継ぐ夏の夜
長崎市　中原　久子

井上　康明 選

磐座をみなもとにして滴れる
八街市　山本　淑夫

△評▽「磐座」は神がまつられた大岩、そこから水がしたたり谷を流れていく。神がしたたらせているかのような清らかな水だ。

屋上のアガパンサスに星と灯と
相模原市　小山　鞠子

△評▽屋上の鉢植えに咲いたアガパンサス。周囲の街の灯と空の星が、涼し気にまたたく。

あの山の麓煙りて夕立かな
北杜市　小松　俊隆

降りしきる蟬声河野裕子の忌
東　京　徳原　伸吉

遺稿みな紙縒綴ぢなる曝書かな
東　京　望月　清彦

独標は風の十字路夏の果
東久留米市　矢作　輝

山麓の桃に蜜入る星の夜
市川市　高野　厚夫

郭公や芭蕉渡りし名取川
仙台市　引地　恵一

琳派展見に薫風の坂上る
佐世保市　相川　正敏

炎天に固く眼を閉ぢ土竜死す
川崎市　久保田秀司

うたは奏でる　恋ひてゐるごとき

染野太朗

大崎瀬都歌集『みづぐるま』を読んだ。本歌集の大きなテーマは父の死と母の看取りであり、それらの歌からにじむ心情の機微にはやはり胸を打たれるのだが、ただ、その側面だけを強調するとこの一冊を読み誤るようにも思う。

・青春の日々なればときにシベリアを激しく恋ひてゐるごとき父

作者の父は酔うとよくシベリア抑留の体験を語っていたようだ。実際には恋いなどと思っていないはずである。しかし、凄絶な経験だったからというだけでなく、父の青春期と重なっていたからこそ、父という人間の根幹を成すものとして熱量をもって語られるのだと作者は見ており、それが「恋ひてゐるごとき」という、一見するとシベリア抑留のむごさとは相いれないはずの比喩を導いている。肉親に対して感情面で寄り添うばかりではありえない、ものごとの本質を見極める透徹したまなざしがここにはある。

・機関銃のやうに喋つて旧友は電車を降りぬ手を振つてゐる

一方的に喋りつづけた友を車内からぼかんとして見ているのか。友への皮肉のニュアンスもありそうだ。先に挙げた父の歌とはまったく異なるテイストで、軽いユーモアの歌として読むこともできるが、ここにも、対象を丸裸にして平然としているようなすごみを私は感じる。

この歌集には他にも実にさまざまな魅力が詰まっている。すべては語りきれないのがちょっと悔しいくらいである。

・染みひとつない青空にすみずみまで雲を捜せり母の逝きし日

（そめの・たろう＝歌人）